

◎座談会 実践現場からみたパートナーシップ

■石川 章・内海 宏・清水 靖枝・守屋 直・丸山 由利子・竹前 大・重内 博美・中川 久美子

1 パートナーシップの進め方

中川 きよは、パートナーシップ型事業に直接携わって来られた市民の方、行政の方に
お集まりいただきました。みなさんの経験を
通して、パートナーシップについて、考えて
いらつしやることをお話しいただくことと、
これから事業を担当していく職員の人たちが
元気になれるような事例を、失敗例も含めて、
紹介していただければと思っておりますので、
よろしく願っています。

八年度にスタートしたパートナーシップモ
デル事業は、蓄積があるところをステップアッ
プするものから、形だけのパートナーシップ
の内実を変革するというような展開まで、ス
タート時点がいろいろあると思うんですけれ
ど、実際にモデル事業を企画して、実施する
竹前さんから見ると、どうですか。

竹前 まず、パートナーシップ、とか、市民
参加”という言葉を、我々行政から見るとき
に、どう理解したらいいのか非常にわかりに
くいという面があると思うんですね。当日に

市民が参加しているということだけをもって
パートナーシップを組んでいるじゃないかと
いう人もいます。実は、僕もそういう感覚を
持っていたんですが、去年(プロジェクトで)
いろいろ議論した結果、市民が参加している
という現象は今までもあるけれど、それが果
たして真のパートナーシップといえるんだろ
うかといったところから発想しないといけな
いのではないかと、今では思っています。

今の行政施策というのが割と、行政側が考
え、市民がそれを手伝っていくという形が多
いと思うんです。それを市民が中心になり行
政が支援していくという形に変えていく。そ
れを今回モデル事業という形でテストしてい
るということです。

実際、それぞれの現場では、自分の所管し
ている仕事の中で、(パートナーシップを)
どう展開していくのか、その辺に迷いとか混
乱があるのかもしれない。

仕切らずに進める
中川 そうですね。「もうやってるじゃない。

次のステップって何?」といったときに、説
明しづらいところがありますよね。行政が仕
切った事例がうまくいっているかというそ
うでもない。小川アメリテイのように、清水
さんたちが待ち構えていて、ここに手を入
れるなど。(笑)そこから始まって、最初紛糾
して、持ち帰ってという、そういうやりとり
が重要なのではないのでしょうか。

竹前 仕切り過ぎてしまうと、お互いに信頼
感を持つて接することができない。フリーハ
ンドとはいかないけど、相当絵をかいてもら
うような思い入れがないと、うまくいかない
のではないかと思います。市民の方も、裁量
のない中で参加してくれといってもおもしろ
みもないだろうし、まず、行政側の意識改革
をして、胸を開いていく。時間はかかるかも
しれないけれども、話し合いを重ねていくこ
とから始めるというのが、第一歩かなあとい
う感じがしているんです。

内海 戸塚西公園でも仕切らないで成功した
例がありました。ワークショップの一回目に、
ゲートボール場を確保したいという目的で老

- 座談会
- 開催日 平成八年八月二十一日
- 開催場所 長屋門公園
- テーマ 実践現場からみたパートナーシップ

●出席者プロフィール
(自己紹介より)



石川 章
(街づくりコンサルタント)

生まれも育ちも金沢区。自分の住ん
でいる地域のことを意外と知らないこ
とに気づき、近所の情報を集めるとい
うようなことから、活動を開始。
片足だけのつもりだった区役所の職
員有志・大学生・区民で構成される
『新金沢発掘隊SKOP』のメンバー
として、両足どころか首まで浸かつて
活動中。スコープでは、事業としての
パートナーシップと言うより、活動の
中で個人やグループのパートナーシッ
プができてきたと感じている。
現在は、子供たちに、金沢を伝え、
“金沢”を共有しようと、少年サッカー
を通じて、仲間づくりをしている。

人クラブのメンバーが大挙して来たんですが、使えるところは限られていますから、他の人たちもいろいろな使い方を考えているわけです。「サッカーをやりたいという子どもたちもいる」とか。そうしたら、老人クラブが二回目に「専用コートでなくていいから、使い方で折り合えないか」と。優先的に使用する権利は、老人クラブ以外の人たちに与えていから、空いている時間に使わせてほしいという、この提案で折り合うことができた。お互いに困るようなことがあれば、住民同士で解決する能力もちゃんと出てきます。

中川 仕切らないと、解決能力が逆に出る。石川 仕切りの中だと、そこだけで泳いでいればいいみたいな話になってしまつてね。これは、行政のあり方という部分にもなると思うんですが。例えば施設であれば、仕切られた中で、九時から五時までオーケーだけど、五時一分はだめよという発想じゃなくて、使側と一緒に施設をうまく機能させていくかというところ。ここ（長屋門）は、先駆的にそう機能してくれています。

協働関係を築く

丸山 私は、まず、同じ立場でやるというのが大事だと思えます。行政が、「かみしも」を脱がない面がある。肩書から離れられない。そこを思い切つてちょっと脱いでみる。先日、長屋門をお借りして、区長、部長にも来てもらつて、シンポジウムをやつたんですね。パネラー、市民を含めて、みんなここで車座になったところで「区長、あいさつをお願いします」と言つたら、そこら辺に

いた人がいきなりすつと立つたんで、みんなワーツと驚いた。些細なことだけれども、そういうところから始まるというのが大事なよな気がしましたけれども。

重内 行政がいつも上から市民を見おろしている、市民の側にそういうイメージがあるとする、位置を変えていくところから始めないと、無理ななかもしれないね。なるべく垣根をつくらないように、できる範囲の中で、理想の線まで持つていけるよう、一緒に考えましようという形じゃないと、進まないかなという気はしますよね。

石川 スコップの場合は、（区役所の職員も業務外で活動しているが）立場は違うけれど、思いは同じで、喧々がぐの議論を交わす中で、どうしたら自分たちの思いが生かせるかを考えていくんですね。通常は、正直いうと、用意してあげているという感覚がまだ行政の方たちにはありません。逆に市民の方も、注文はつけないけれど、負う部分も持たないという発想が余りにも多過ぎた。言いつばなしというのが一番怖いことで、それは市民にしる、行政にしる同じです。共に働くという部分がないと、なかなか距離が縮まつていかないかなあと。区の職員も住民もお互いの顔が少しずつ見えてきたことが、スコップの今までの活動の中で非常にいいことの一つかなあという風に感じています。

中川 顔が見えてくるというのは、いい関係ですよ。

清水 区役所の地域振興課、あるいは区政推進課、あの辺に住民が職員の隣にいますを持つていつて座っている、そういう風景がそここ

こに見られなかつたら、本来のパートナーシップはとれないと思うんですよ。カウンター越しに話しているようでは絶対だめだ。そうするためには、区民側がそうやってずかずか入つていく手法を会得するより、カウンターを取つ払つて「どうぞ」という姿勢を行政側がまず見せてくれることだ。

瀬谷市民の森の和泉川源流の部分については、自分から進んでカウンターを越えようと努力して、いろいろなところから入り込んでいったので、情報が取れた。そこから、結果的には、いい関係ができて、池を掘るときなんか、行政も活動グループもコンサルタントもなく、泥どろになつて一緒になつてやった。パートナーシップという言葉をきつかけに行政も市民も一つ柵を飛び越える。ただの流行政じゃなく、本当のいい関係に市民と行政が生まれ変わるきつかけにしていく。仲よしごっこで手をつなげばパートナーシップだと思つたら大間違いで、それぞれが苦労して勉強してお互いある程度のレベルまで行つて、そこで初めてパートナーシップというのは保てるんですね。

2 一市民相互のパートナーシップ

変革をきつかけに

中川 区民の集いを話し合い型に変えたというの、どういうやり方をしたんですか。

丸山 いろいろ工夫を凝らして。コンサルタントとか、大学の先生とか、コーディネーターをつけた。それから、参加者を分科会で分け、ワークショップ方式を取り入れたんです。



内海 宏
（都市プランナー）

生まれも育ちも戸塚区。パートナーシップには、都市プランナー（仕事）という立場と、市民としての立場という両側面から関わりを持つている。舞岡地区センター、ドリームハイツ・戸塚西公園など活動のフィールドは幅広く、今回の市民参加事例研究会のメンバーでもある。

活動の中で、パートナーシップを考える機会が増えるにつれ、抽象的な議論ではなく、具体的な問題や、何かをやるということを通してしか、共通の土俵は形成されないという感が深まってきた。理想的なパートナーシップを築き上げるには、時間がかかると思うが、今後もひとつずつ着実に進めていきたいと思つている。

人数が多過ぎて、全員の発言までいかなかったけれども、参加意識が湧いたと思うんですね。もう一つ、最初に大学の先生に問題提起をしてもらったんです。このまちはこうですという感じの非常に具体的な提起を。それが呼び水になっていく。そんな工夫をしたら、対行政風じゃなくて、自分たちで考えようというふうになりました。

清水 成功したのは、メンバー構成にもよるんじゃないかしら。

内海 そうですね。それと、会議の形式も効果的です。教室型になると、一問一答型の要望大会にどうしてもなりますよね。

清水 「要望じゃなくてみんな意見を出し合っているからね」って口を酸っぱくして言っているんだけど、区民会議の長い歴史があつて、それを覚えていくというのは大変なことですよ。

理解し合える機会を持つ

内海 戸塚の地区懇がモデル事業になってますよね。自分の地区の地区懇に出たんですよ。百二十人も集まったんですが、その時、連合町内会長がへんに仕切らなかつたんです。それで、四十人ぐらいずつ三グループに分かれて、僕は青少年問題のグループに参加した。

そうしたら、期せずして、一種のディベートの形になったんですよ。子供会連合会とかそういう人は、青少年の問題というのはとにかく非行防止を徹底しないとだめだとか、子供会の加入率が落ちていることが青少年問題を複雑化しているとか、発言して、ところが、僕らとか子育て真っ最中の奥さん連中から

「ちょっとそれおかしいんじゃない？」という話が出て、それからずうっとディベートです。

でも僕たちは、子供会の人たちが、そこまで苦労してやっているということも知らなかつた。その意味ではやっぱり知つたんですよ。向こうは向こうで、ああ、おれたちのやっているのは、ずれているのかなという、要するに参加者全員が非常にクリアに問題を確認する場になったんです。

中川 モデル事業の参加形態に代表公募型というのがありますが、そこで、知らない世界に触れてみるというのも、市民同士のつながりをつくるきっかけになるかななんて思うのですが。

内海 自治会の中でも、グループディスカッションにポストイットを使った意見出しとか、取り入れるところがあらわれ始めました。これを使うと結構みんな自由に物が言えるんだなあとというのがわかつてきた。

重内 自治会・町内会と、テーマ型と乖離してしまっているというのはものすごく残念だなあと思っていますよ。自治会に対する固定観念があつたり、テーマ型に対する拒否反応があつたり。自分が区役所についておつき合いをして、そんなことはないなあと感じてましたから。それぞれユニークな発想の方もいらつ

しゃるし、うまく一緒にやってみたいのができればいいなあと思います。行政と市民の関係と同じで、あいつら何やっているかわからないとか、両方でイメージだけで思い込んでいるような……それぞれの特色を生かしながら、融合していくというのか、一緒に

やっていければと。

清水 それはもう行政側の姿勢だと思つたすよね。住民同士の融合の努力を行政がうまくつなげていく姿勢があるかないかで大分変わってくると思つたんですよ。

竹前 今回のモデル事業をやっている中でも、地域組織である町内会や区民会議にフィードバックさせたいという狙いがあるんですね。まちづくり塾で出てきた人たちが、町内会活動に理解を示して、町内会活動の将来の担い手になつてもいい。また、テーマを選定する

中でも、区民会議の代表委員の方に入つていただいで、スタートからそういう目で活動を見てくださいたいというような仕掛けをしたり、なるだけ両者が同じステージに乗って自分たちの事業と比べながら参加できる、そういう形で見守れるような場面設定を行政側がしてあげる、そういう配慮が支援ではないかと思つています。その中で喧嘩がぐくぐくやって、融合していくというプロセスは絶対必要ではないでしょうか。

石川 金沢区の例ですが、山から湧き出した水が海に流れる、その流域でテーマコミュニティの人たちが川の活動をしています。一方、連合町内会が下流部でアシを植えている。それを、行政サイドの苦労と努力で、融合させていった。お互い連携を取り合いながら、「金沢水の日」という一日のイベントを通じて、握手ができ、ずうっとつながって、膨らんできた。場面だとかテーマだとか共有できるものが絶対あるはずだし、場合によつたら利害が相反するだとか領域侵犯だというような議論に届いてしまうこともあるかと思うの



清水 靖枝
(長屋門公園歴史体験ゾーン事務局長)

住民の手による住民のための施設「長屋門公園」の運営に尽力するかたわら、和泉川源流の保護保全活動に参加するなど、精力的に活動中。和泉川の活動の中で、すべて両者が同じテーブルについてやっていくという、行政との理想的なパートナーシップを体験し、行政を大きく見直す機会となった。長屋門でも行政が建て、資金を住民に委託する。住民はそのお金を地域のニーズにあつた形で自由に役立てていくという手法で運営が進んでおり、パートナーシップがうまく結んでいる。根が楽天的なせいとか、失敗事例は、身近には見当たらないと思つている。



守屋 直
(市民局区連絡調整課担当課長)

ですが、同じ地域に住む人間としての思いというのは多分一緒だと思っんですね。

3 信頼関係づくりとその継続

信頼関係は一日にしてならず

中川 内海さんは、コンサルタントとして、もう二十数年苦勞されて、蓄積があると思っんですけれど。

内海 初動期がとにかく大変。要するに、どう信頼関係をつくるか。舞岡地区の検討会の立ち上げでも、結局、動き出すのに一年間かかるんですよ。今まで信頼関係がないんです、基本的に。舞岡のケースなんかでも、いろんなことで裏切られ裏切りということをずうっと積み重ねてきているわけ。(笑)

「裸でみんな集まって、一人一人がパートナーという立場でともに汗を流しながらやろうよ」と幾らいったって、いや、うそだろうと、腹の中ではみんな思っっていて、それを吐き出す作業がすごく要ったんです。

キヤッチボールする中で変わっっていくシナリオは幾ら書いても僕はいいと思っんです。だけど、シナリオをみたら、これはやらせだとか、今までのやり方とどう変わるんだという反応というのがかなり出た。

守屋 「地域のまちづくりのプランを一緒に考えましようよ」と地域に声をかけたとき、行政がプランを持ってきて、市民はそれについて何か言うというスタイルをイメージする。そこで意見を聞くというのが、これまでの市民参加だった。

中川 その辺は敏感でしようね。

内海 非常に敏感です。今回は本気だなあとわかるまで動かないというか。「今までの方法じゃない方法なんだよ」と言っても、言葉では信じない。担当の腰がすわっっているかどうかを見極めてる。そのかわり、一回信頼関係ができる、それは結構長続きする。

竹前 総合モデル区としてのモデル事業をやっで感じるの、全的に機運を盛り上げてやっでいくメリットというのは、上から下まで、モデル事業なんだからそれなりの姿勢で取り組まなくてはいけないという意識がすごくあるんですよ。だから、非常にやりやすい。局の方の応援もあっで、アドバイスももらったり、そういう意味でも非常に心強い。区役所だけでやっでやっでない、全体で取り組んでいくんだというところがあるんで、組織としての盛り上がりがあるんで、区役所に出たかたなあと感じで見ているんですよ。これが定着してくれば市民も、担当がいいからとか、そういうことだけじゃなくて、区役所として信頼されるんじゃないかな。しかし、それは結構時間がかかるかもしれせん。

行政の仕組みづくり
内海 今、区役所の中に、地域のまちづくり、地域としてトータルにコーディネートする部門はどこにもないんですよ。だから、地域を継続して見れる構造がどこにもないんですよ。東京の二十三区なんかはみんなまちづくり推進課みたいな、要するに縦割りのセクションじゃなくて、縦のものを束ねるセクション、それで総合コーディネートしていくセクションがあるでしよう。

石川 金沢の場合、各課が一緒に金沢区役所内支援プロジェクトかな、それをつくっで。来年三月の一つの大きなイベント、エポックに向けて、縦じゃなくて、横にくしが刺されたような状況で動き始めてる。これが何でもっと早くできてなかつたのかなあ。行政の縦割りという言葉はもう耳タコですけれども、そうでない部分が少しずつ動き始めたのはやりやすいなあ。

丸山 緑区でも地区担当制を始めましたが、そういう仕組みと同時に、自分の仕事についで、各課が企画調整力を持つことが必要ですね。

竹前 区政推進課でトータルコーディネートをしてやろうとすると、多分巨大な課になっでしまっで、個々のセクションで、例えば今防災拠点別にエリアで地区担当ということ各課の管理職が地域に張りついでいるんですよ。けれども、そういう横のエリア的思考をそれぞれ持ってもらっで。それには、意識改革というんですかね、職員育成システムみたいなところはやっでやっで不可欠じゃないでしようか。

丸山 あまりパートナーシップに向かないなあ、内気だなあと、そういう人に楽しさを覚えさせるといっで思っんですね。一回楽しんじやうと、もう抜けられなくなるというのがあるんですね。

守屋 今年度からのモデル事業に合わせて、それぞれの事業担当者はもちろん広く区・局の職員が参加できる形で、元気の出るような参加事例や、ワークショップなどの話し合いの技法を学ぶ研修をスタートしたんです。職員一人ひとりの「小さな期待と大きな不安」

パートナーシップ推進モデル事業の担当として、区役所と共に奔走する毎日。

モデル事業は、これまでの市民参加をさらに発展させようというのから、ここからはじめようというのまで様々で、地域への入り方、関連局との調整など、不安や課題を抱えながらのスタートというケースもあっで。しかし、現時点では、始めてみれば、楽しみながら市民参加を進めていけると市民も行政も実感できそうな段階まできたのではないかと思っでいる。今後は、市民参加型事業に携わる職員のスキルアップにも力を入れ、一期事業だけでなく、二期事業と、区役所にいろいろチャレンジしてもらいたいと思っでいる。



丸山 由利子
(緑区区政推進課長)

「中山地区センター」で、地区センターとして初めて、建設委員会委員の公募を取り入れたほか、自然環境の保護を市民の活動を取り入れた形で推進していくための「緑と水の回廊ワークショップ」や、長津田、中山、鴨居の各駅周辺の「まちづくり協議会」、連合自治会ごとの地区懇談会、陳情型だった区民のつどいの話し合い型への転換、など、いろいろな形で市民参加を推進中。

手を広げ過ぎたかなという気もするが、職員皆と、楽しみながら取り組んでいる。

が「大きな期待と小さな不安」に転換するよう楽しい研修会を続けていきたいと考えています。

市民と行政の関わり方

中川 重内さんは楽しんで仕事をする最たる人という感じですが……。(笑)

重内 区役所で二年間、本当に楽しく過ごさせていただきました。(笑)

特に地域防災拠点とは、本来の仕事とは全く違う分野で、いい経験をさせてもらいました。立ち上げの会議で、また行政の押しつけかたという不信感がドーンと来たんですね。地域におおして地域で考えてほしいと言っておいて、組織をつくるまでに一か月しかないとは何事だつて。そんな出会いだったんですが、その地域というのは、前向きで、文句はあるけど、せつかくつくるのだから、きちんと考えなくちゃいけない。例えば、行政のひな型を出しても、自分たちできちんと考えましよう、全部組み立て直して。そのパワーに比べて信頼されるには、とことんお付き合いしよう。午後八時頃から始めて、家に帰れるのは夜中。お酒の一滴も飲ませてもらえない。(笑)

区役所の中では、そこまでいくと趣味だといわれたんですけれども、それほど楽しかったというのかな。別にそこまでしなくたってという考え方もありますよね。だけど、新しい組織や活動を立ち上げるとときに、本気だとか、信頼関係を結ぶんだとすれば、同じようにやらなきゃいけないかなあと。地域のパワーと、私流の信頼関係の結び方を学ばせてもらいました。

中川 市民と一緒にいる時間の量みたいなものが多分ベースにあると思うんだけど、なかなかそこまでは……。

重内 アプローチの仕方とか、信頼関係の築き方というのは、個人とつき合うときと同じで、それぞれの個性がどう信頼し合うかということですから、やり方はいっぱいあっていいと思うんですよ。

竹前 僕なんかは逆のことをやってたんですよ。区役所におんぶにだっこになってしまったという例があつて、担当職員がかわつたときに、おまえはもう手を出さな。そうしないと、区役所に任せておけばいいやということとで進んでいってしまう。で、その担当は泣きながら、「前の担当はやってくれたのに何であなたはやらない。能力がないんですか」とか、いろいろ言われているんですよ。しかし、やるなど言われているからここまでで一年頑張らせていたら、相手方がすごく変わってきたんですよ。「あなたたちが言っていたことがだんだんわかってきた。やってみると楽しいじゃない。お財布まで持たされるところを悩みながらやって、成功した喜びは、区役所がやってくれるから安心だと、ただ当日お手伝いに行っていたときは全然違うことが、やっとわかりました」という話が出てくるのに一年かかったんですけれども。そうになると、今度はそういう仲間がネットワークし出すんですね。自分たちがやらなきゃいけないという意識が出てきて。当初は役所の責任放棄だということまでいわれながらね。ある意味で一緒に汗をかく、やっと

スタートラインに来たなあということ、今、すごくいい関係にあるんですね。

重内 パートナーシップそのものがそうだと思うんですよ。相手が違うわけだから。くぬぎ台の場合は、行政がやってあげることなんか何にもないんですよ。一緒に何ができるかですね。

竹前 ひざ突き合わせても全部やってしまうんじゃないかと、身を置いていても、その関係をきちんとして整理していることができるかどうかかもしれないですね。

重内 今までのように、形式上パートナーシップだけれど、事務局も全部区役所にあるみたいな場合には、やっちゃった方が楽なんだけれども、変えていく我慢みたいなものは必要かもしれないですね。

丸山 私は、相手の市民の方の成熟度とか自立度に依りて行政側の手の出しかけも変えてしかるべきかなあと思うんですね。下地づくりのときは結構手を入れないといけないかなという気はしました。下地づくりができて、ある程度区民の側にコーディネート機能ができるようなになれば、こちらは手を引くというか、そういう度合いが必要かなあという気がしていますけれども。最初から手放して「さあ、どうぞ」といわれても、なかなかうまくいきませんから、最初の人集めぐらいのところは割と手をかけてやって、だんだん向こうが自分で何でもできるようになれば、「どうぞ」という感じですね。

内海 僕なんか「これは内海さんが書いてくれるのが一番早いよね」と言われると、「いや、僕は絶対書かない。まず書いて」と、厳



重内 博美
(企画局調査課担当係長)



竹前 大
(港南区地域振興課生涯学習支援係長)

昨年度の市民参加推進プロジェクトのメンバーでもある。八年度は港南区のパートナーシップモデル事業メニューのひとつである「港南まちづくり塾」を立ち上げ、現在、応募があつた四十三提案から塾テーマを選定する作業中。港南まちづくり塾は、昨年、プロジェクト調査で訪れた長崎市における「伝習所」という活動をモデルにし、港南区の地域環境や住民意識に沿う形に組み立てた事業。市民発案、公募、活動・学習という流れで行う予定。この事業を進めていく中で、支援と協働を通して、新しい市民の活動や行政との関わり方といったものを模索していければと思っている。

しい言い方をすると、突き放すというか。そうしていかないと、だんだんだんだん頼る頼られる構造ができていくというか。

中川 やり過ぎててもやらない過ぎてても、微妙なところで……。

守屋 だんだん地域に深くかかわってくると、どこまでが仕事で、どこから仕事を越えたのかわからない。初めからここまでとは、決められないから、地域に目を向けて、やれるだけやろうという気持ちが大変なんだと思いますよ。

石川 区の職員が、自分の勤めている行政区のことを知らなさ過ぎるという区民の声も結構あるわけですね。資質というところと酷かもしれないけれども、そんな部分もあるのかなあとという気はすごいですね。

継続性の確保

中川 区の職員とある市民という顔の見える関係の信頼関係ができたとしても、異動などで、波が出たりしますよね。

内海 戸塚区役所の例で言えば、区政推進課の入り口には、カウンターがなくて、誰もが、ずっと入れて、だれでもそこでおいしいドリップのコーヒーを飲みながら、おしゃべりしている場があります。それまでは、連合町内会長とか、区民会議の人とか、ぶらりと寄ることはあったのですが、平成六年のフォーラム以来、テーマコミュニティの人たちもぶらりと立ち寄っているいろいろな話をして行っています。だけど、こんな場所があってもこの状態がいつまで続くかわかりません。人が変わっただけで、なんとなく行きづらくなっ

たり、足が遠のいたりといったことが起きかねません。

清水 ちよつときつい言い方だと、区役所にいる職員の人というのは往々にして本庁の方に顔を向けているでしょう。だから、区役所で、自分はこの区が好きだからここでずうつと区民として何かやっていこうという思いの人がどのぐらいいるか、そこら辺も随分かわってくると思うんですよ。そうなるとうち分権の話になつちやう。課はかわつても区にずうつといるんだという思いの人と、ここは腰掛けで、それこそ一年か二年ですぐ向こうへ行つちやうという人では、やっぱり思い入れが違うと思うんですよ。でも、大体頑張つてやっているとポーンと持つていかれてしまう。全体的な横浜市という一つの大きな組織が、区を重視する方向に変わっていかないといけないんじゃないかなって、私たちは今切実に感じているんですよ。

丸山 私は職員交代というのはそんなに悲観視してないんですね。逆に新陳代謝という意味で、いろんな人をそういう場面に携わらせてあげるとい意味では、若い職員は短期で二年とか三年で異動させてしまうというシステム自体にはむしろ賛成なんです。二年とか三年の間に住民の方の組織を育てるということをきちんとすれば、ある程度うまくいくと思うのです。それがないと、いい人がいい職員に頼ってしまつて、あの人がいなくなるともう落ちてしまつてしまう感じがなくなつてしまふんじゃないかなあと思うんですよ。石川 確かに、いろいろ試行錯誤しながらやっている中で、やはり波が出てきてしまふ。

清水 パートナリーシップでいい関係になればなるほど、それが大きいよね。それは頼るという意味とはまた違うんですよ。

内海 違うんですよ。

中川 継続性の問題というのは、私もすごく大きなテーマだと思つているのです。地域まちづくりのような生活レベルになつたときに、本庁の業務みたいなものが継続していくのと、人が暮らしている場面の継続しているものが、なかなかかみ合わない。そこをどうつなぐのかというのは大きな課題ですね。

守屋 局行政と区行政のパートナリーシップというのが、重要な要素になる。局の予算や事業スケジュールと、区の市民の考えを取り入れた事業展開をどう調整していくか。さらに、人や組織の評価もパートナリーシップを進めていくことも今後の行政の大きな課題だと思います。

今後モデル事業推進の中で、課題整理をしていきたいと考えてますが、やはりベースは市民も行政も「やったね」「良かったね」と言える体験をもつと積み重ねていかないと、と思います。パートナリーシップ推進モデル事業は、来年度の二期スタートも含め全区で展開されるわけですが、市民も行政もいろいろ悩んだり期待したり、それらを相互に理解しながらいい方向に変えていきたいですね。中川 たくさんのお話が出て課題も頂きましたが、有意義だったと思います。今日はどうもありがとうございました。

—了—

三月まで、保土ヶ谷区地域振興課で、区民利用施設運営・文化振興・国際交流の分野で市民と一緒に事業を進めてきた。また、地域防災拠点では、くぬぎ台小学校を担当した。

事業を実施していく中で、パートナリーシップの重要性を実感した。新たな展開だけでなく、現在、形だけの市民参加になつていく部分を実質的なものに転換していくことも課題のひとつだと考えている。

また、多くの市民活動に触れ、市民のパワーや課題解決能力に学ぶべき点を多く見出すことができたことは、自分にとって大きな財産になったと感謝している。

●コーディネータープロフィール



中川 久美子
(企画局調査課担当係長)

昨年度市民参加推進プロジェクトメンバーでもある。市民参加について、長年調査を続け、行政・市民どちらのサイドにも、幅広いネットワークを持つ。各区担当者として試行錯誤しながら、パートナリーシップモデル事業を推進するかわり、事業担当者向け研修にさまざまな趣向をこらし、人材育成に力を注ぐ毎日である。